

論文の内容の要旨

論文題目 石庭の構成要素と配石原理に関する研究

氏名 宮 江介

自然石の形状をそのまま生かして用いる石庭は、作庭空間に非対称な配置を行う点に特有の美を作り出す法則があると伝えられている。

この技法は長い歴史の中で独自の発展をし、平安期の『作庭記』を初めとする古典技法書にも記され、現在においても国内に多数の名園を残している。

しかし、その構成要素や配石原理については基本的な心得が抽象的に記されているのみで、現場においてどのような技法や手順を用いるかの判断は経験豊かな庭師の感性に頼る所が大きい。

実際に庭師の勘や経験を主とした技法は徒弟制度を通じ口伝と現場での実践により伝えられてきたが、今日迄の伝承過程で育まれてきた日本庭園の景観が産み出す効果や伝統的作庭技法は、経済合理性等が重んじられる現代社会においては、今後捨象される可能性すらある。

又、昭和期に入ると抽象的な表現によって把握されてきた作庭技法を学術の対象として捉え、分析、整理を試みる研究が多く行われた。

これらは、現存する歴史的な庭園や古典を対象に、景石の特性を考慮した石組の方法、石組を構成する景石数と規則性、高さや位置の関係の3項目を基本的な配石技法として整理を試みている。

こうした一連の研究成果は庭園の景観構成に関する原理を広く整理し言及したが、特定の庭園や古典を研究対象としている為、導かれた構成要素や配石原理には自ずと限界があり、昭和中期には、その応用可能範囲や一般化に関する議論が「こはん論争」と呼ばれる形で『作庭記』の言葉の解釈を主題に盛んに行われ、現在においても未だ結論には至っていない。

尚、近年の研究では、当時の指摘や議論を参考にして、定量的に構成要素や配石原理を論考した研究が主に以下の三つの手法によって行われている。

まず、一つ目の手法は景石間の相対的な位置関係に着目し、石庭を構成する上での偶数と奇数の最小単位を基本に小石群と称し、2石石組、3石石組の景石間における相対的な関係性に対して、立面上の高さ比率、平面上での位置と距離関係、庭園を眺める場所からの見え方、景石頂点相互の傾きの関係に着目し、定量的に構成要素や配石原理を明らかにした研究がある。

次に二つ目の手法は、景石単体の特徴に着目した研究として、やはり石組の基本単位を2石石組、3石石組の小石群と定義し、景石個体の有する形状、斑模様、凹凸の3項目に対する定性的な特徴について現地に於ける聞き取り調査や石組に対する写真判定を用い、景石個体の特徴と配石の関係に対する解析を試みた研究が行われ、先述の相対的な関係では解

積できない他の構成要素や配石原理の存在を明らかにしている。

この結果、2 石石組、3 石石組については、相対関係手法、景石個体手法の二つの側面から、構成要素や配石原理がある程度明らかにされた。

そして三つ目の手法は、実際の庭園において多数存在する 5 石、7 石、9 石の石組について、構成要素や配石原理が既往研究や古典においてもあまり具体的にふれられていないことから、こちらを中石群と称し、石組の基本単位と考えられる偶数と奇数の最小単位の複合体から成り立つとした仮説を立てた上で、「相対関係手法」と「景石個体手法」に基づき定量化と整理を行う形で構成要素と配石原理の存在を明らかにしている。

これらの背景から日本庭園における石庭や石群には一定の規則が存在すると考えられる。しかし、既往研究を基に行われた三つの研究手法については一定の数値化が叶っている反面、研究範囲が限定されており石庭内の小石群・中石群以外の構成数を含んだ石組全般についても、更には単体で配石される景石や石庭全景との関係についても不明瞭のままである。そこで本研究では先行研究の定量手法と、既往研究の広く整理した論考について、合わせ応用する形で、石群全般や石庭の全体景観についても定量と検証を行う事により構成要素と配石原理に関する一定の結論を求めた。

従って本研究第 1 章では「序論」と題して上記の背景を整理して述べ、本研究の目的を①実存する石庭に対する実態解析から、構成要素と配石原理を明らかにすること。②古典の造園技法書と近代の庭園研究にみられる作庭技法の抽出・整理・比較、及び石組実験と作庭実験などを通して庭師に受け継がれる配石技法の抽出・整理・比較から、構成要素と配石原理を明らかにすること。③上記①と②の共通性や差異性について考察を行い、石庭の構成要素や配石原理を明らかにすることを掲げた。

第 2 章では「研究の方法」として、具体的な対象と手法と手順についての整理を行った。対象については、先行研究や既往研究を参考にして本研究の対象となる石庭を 18 カ所選出し、各石庭に視点を 1 カ所設定し、石群を 217 組抽出し、景石数 546 個の採集を行った。手法については、実際の石庭と石群に対する実測を基に、景石・石群・全景に対する位置関係や、高さや、距離関係などの数値化による整理から 10 項目の実態解析手法を設定し、既往研究や古典などで言い当てられている石庭と石組と景石の関係概念を整理し、実態解析の結果に対して検証を行い、更に実際に作庭に携わる庭師への聞き取り調査と心理実験による検証の 3 軸から石庭の構成要素と配石原理の考察を行うための手順を整えた。

第 3 章では「石庭と石群の実態解析」として第 2 章に記した手順に準じ、研究対象を整えた後、具体的にⅠ・石群内で最大体高と各部の位置関係、Ⅱ・石群内最大長径石と各部の位置関係、Ⅲ・石群内最大質量石(体積)と各部の位置関係、Ⅳ・石群内景石の高さ合計と各部の位置関係、Ⅴ・石群内景石の長径の合計と各部の位置関係、Ⅵ・石群内景石の質量(体積)合計と各部の位置関係、Ⅶ・石群の見え幅と各部の位置関係、Ⅷ・石群の高さや質量の減少傾向と各部の位置関係、Ⅸ・石庭内の景石以外の構成物と配石の位置関係、Ⅹ・景石個体特徴に関する効果や配石変化の有無の合計 10 項目から定量による比較整理を行い、Ⅰ・Ⅲ・Ⅷ・

Xに数値による規定傾向とⅡに特徴的な配置傾向が見られた事から構成要素や配石原理に対する非対称性や動的均斉の実態が示される結果を導いた。

第4章では「古典技法書や近代庭園研究と庭師技法等からの検証」として、実態解析から得られた結果に対して、「作庭記を含む古典技法書」「近代庭園研究」「庭師技法」の3項目にみる考え方を抽出し整理した後に、第3章で行った実態解析より得られた数値との整合性や妥当性の検証と確認を行った。

まず、「作庭記を含む古典技法書」と「近代庭園研究」で述べられている庭園の構成や石組の技法から検証を行い、江山による「生物の成長過程に類似した動的均斉」など代表的な論考からも一定の整合性が確認された事から実態解析による定量値からの規則性に対する、史実からの客観性と妥当性が確認できた。

次に、「庭師の技法」については今迄の研究成果と実際の庭園写真による聞き取り調査と、模型や盆景を使った作庭実験から、非対称配置や動的均斉の構図が確認出来た為、本研究で得られた結果に対する整合性や妥当性の確認が出来た。

この結果、聞き取り調査における「作庭記を含む古典技法書」と「近代庭園研究」から史実的な整合性や、写真判定からの妥当性の確認が叶い、同時に作庭実験からも実態解析の結果に対する整合性を確認できた事から客観性の確保が出来た。

第5章では、まず、第3章の定量結果と第4章の検証結果について整合と不整合の整理を行い石庭の構成要素と配石原理を明らかにした。

第6章では、第5章で整理した結果を基に「まとめ」と「考察」から「結論」を導いた。結果、石庭の全景と、その中に存在する単景石・小石群・中石群・その他の構成数による石群・全体石群の関係について石庭空間における時計回りの矩形に広がる数値の終わりを限りとした最後の石群まで考察出来た事も含め、石庭における構成要素と配石原則を明らかにする事から、構成要素と配石原理共に非対称性と動的均斉が存在する事が読み取れた。即ち、小石群はその基本となる偶数と奇数の最小単位である2石と3石の石組から成り立ち、これには「相対関係手法」と「景石个体手法」による二種類の配石技法が有り、この技法には非対称な構成要素や動的均斉を持つ配石原理が確認されており、これらの条件下で配石された小石群による複合体が5石、7石、9石の石組となり中石群を形成して、更にその集まりが単景石やその他の構成数の石群を含めた形で全体石群となり、一つの石庭として本研究で述べてきた一連の構成要素と配石原理として、自己相似幾何学的な要素を持った形で複合しつつ、最も体高のある景石を有する石群を軸として体高が低くなるにつれ自由度の高い範囲で広がりつつ配石され、全体石群を形成して石庭としての空間を構成しているとした一定の考察を導いた。

そして最後に結論として、石庭においては最も体高のある第一石群を主体に中心核となり、視点から眺めた際に左側に第一石群が形成され、そこから石群の流れが矩形による広がりを見せる形で時計回りに外に広がり、体高の数値の大きい順に配石され、順に体高や質量の数値を小さくして行く傾向を確認できた。

又、小石群から全体石群までの構成要素と配石原理がほぼ同一の傾向で矩形の長辺と短辺を時計回りに繋ぎ、平面上の範囲を広げながら、立面上の高さを低くしつつ、様々な石群が広がる構造の延長線上の左右に付属して配置される事で全体石群を形成しており、それぞれの石群間の相対関係については平面図上及び視点上、どの3点を結んでも頂点を不均等な三角形で線上結ぶ形に成り、これを非対称配置や動的均斉の存在として実態解析により得られた数値、文献と研究からの史実検証、庭師を対象とした心理分析からの実験などを経て、第1章に記した目的①②③を結論へと導いた。